報　告

精神看護事例検討会の方法論に関する研究

－参加者の意識調査の分析から－

堂下　陽子*・山﨑不二子*

A methodological study of case conferences for psychiatric nursing

－An analysis of the investigation into the participants－

Yoko DOUSHITA and Fujiko YAMASAKI

要　約

精神障害者及びその家族に関する事例検討会の参加者を対象にアンケート調査を行い、学習効果と今後の課題、並びに継続教育の一環としての事例検討会のあり方について検討した。

調査の結果、事例検討会に参加して、援助の学習が深まったり、意見が参考になったりしていた。また参加するだけではなく発表することや、継続して参加すること、活動場所での職種が看護師である参加者のほうがより学習効果が得られていた。しかし全体的に連携を図ることについては、十分な効果は得られていなかった。また参加回数が少ない人や参加するだけの人、看護師以外の職種にとっては学習効果は不十分で、今後の課題となった。

以上の課題をふまえ、継続教育の一環としての事例検討会のあり方として、①現場で活かせる学習となるために、援助の根拠となる学術的な視点を取り入れながら、具体的な内容の意見交換を行う、②話題に多様性をもたせたり、参加者が主体的に意見交換できるようにグループワークを取り入れたりするなどの運営面を工夫する、③視点の異なる専門職種同士が活発に意見交換できるために、お互いの違いを認め合い、自由で率直な自己表現を保障する会の雰囲気やルール作りの必要性、④発表者に対する事前の原稿作成時の打ち合わせを実施する必要性が明らかになった。

キーワード：事例検討会、継続教育、精神看護、会の運営技術

Ⅰ　はじめに

平成12年７月から当大学で行っている「長崎精神看護研究会」は、精神障害者およびその家族に対するケアの質的発展と知識の普及、並びに参加者の相互交流を深めることを目的に毎月精神障害者に関する事例検討と学習会を重ねてきた。

これまで精神看護の現場では看護師が実践から学ぶ方法として、事例検討会が行われている[1)2)]。事例検討という方法は、患者とのかかわりをとおして看護師が“自己成長”をとげることが可能となり、実践的行為としての看護の“かくされた構造”が明らかになり、看護師が自己の看護体験を積み重ねていくことが可能であると報告されている[3)]。また巻田は他職種・複数施設メンバーによる精神科事例検討会の効果について、①提供された事例を共通理解する過程から、看護能力を養うために重要かつ効果的な研修、②検討過程における参加者の相互作用から、グループ・スーパービジョン、エンパワメント効果、③同じ地域で働く専門職種間の交流の効果、④それぞれの活動領域からのトピックスの交換による学習効果をあげている[4)]。

精神科病院における継続教育の課題としては、教育指導者の不足や教育内容と方法がマンネリ化していることなどがあり、経験年数の長い看護職

* 県立長崎シーボルト大学

員の生涯学習への動機付けや看護職員の継続教育を支える地域の教育ネットワークの充実などが課題となっている[5]。また精神科領域における臨床看護研究の困難感についての調査[6]では、指導者の不足があげられており、施設内だけでの現任教育では限界があることが報告されている。

現在、長崎県下の精神保健、医療、福祉に関係している医療や教育機関では様々な学習会や研究会が実施されているが、看護師、保健師の育成を行っている当大学の研究会では、専門職者の継続教育やサポートシステムとして機能していく必要性がある。そこで今回の研究では継続して行ってきた事例検討会を、参加者全員に対するアンケート調査により事例検討会の学習効果と今後の課題を明確にし、継続教育の一環としての事例検討会のあり方について検討したので報告する。

Ⅱ　長崎精神看護研究会のこれまでの経過（表１）

長崎精神看護研究会は平成15年10月までに29回（そのうち学習会２回、講演会１回、事例検討会26回)、ワークショップを２回実施した。参加者の内訳は看護師、保健師、精神保健福祉士、活動所指導員、ケアマネージャー、教育関係者、大学院生及び精神看護学ゼミ学生で、延べ参加人数は約738名である。参加者は病院で勤務している看護師がほとんどであるが、精神保健福祉士や保健師、訪問看護師、活動所指導員など地域生活支援において連携を図っていく必要がある職種の参加もみられている。また研究会のテーマも病院内の看護や患者―看護師関係を振り返ったものから、事例を通し地域全体に働きかけたものや、社会資源の紹介、地域の作業所の活動報告など病院と地域の連携に関わる内容に変化しつつある。

会の運営は、司会、進行は大学教員が行い、精神障害者及びその家族のケアに関わっている専門職者に、対応困難であったり、気になったりしたことを事例として発表してもらい、参加者全員で検討するという方法をとっている。時間は３時間ほどで、参加者には参加費を徴収し毎月の案内の通信費や資料代に使用している。これまで、14名の看護師、２名の精神保健福祉士と保健師、１名の看護教員の合計19名の事例発表により26回の事例検討会を実施している。

表１　研究会のテーマと参加者

	日　時	内　容	参加人数（延 738名）
１回	平成12年７月	屯用薬の要求が頻回で、水中毒のため隔離室を使用している患者の看護の振り返りと今後の関わりについての検討	14
２回	10月	受け持ち看護者として３年間の振り返り～自分の迷い、患者の変化の整理による今後の関わりを検討～	10
３回	12月	家族内葛藤のあるケースの家族看護についての検討	8
ワークショップ	平成13年１月	テーマ「慢性精神分裂病者の社会復帰への働きかけ」講演「グループの枠組みを使った退院促進の試み」 事例検討２例「慢性精神分裂病患者のセルフマネジメントについて」「患者にとっての社会復帰について」	50
４回	２月	奇異・不自然・問題・多飲行動のある患者の看護についての検討	13
５回	３月	入退院を繰り返す人格障害患者の退院に向けてしきり直しと社会参加への支援	28
６回	４月	境界例患者の一考察～16才少女の関わりを通して～	25
７回	５月	そう状態のために、衝動のコントロールがきかず借金を繰り返してしまうケースの退院支援についての検討	10
８回	６月	病棟改築に伴い開放病棟への移動後、日常生活動作に介助が必要となり、状態が不安定になったケースの検討	18
９回	７月	健忘に対し無関心であるような態度であるが、清潔の保持、良質な睡眠がとれておらず、常に警戒しているケースへの看護介入についての検討	16
10回	10月	関係性がとりにくく、頑ななケースへの今後の関わりとこれまでの経過の振り返り	16
★11回	11月	患者情報保護に関する検討会－精神看護学臨地実習における同意書、ならびに実習記録物の保管・管理の問題－	23
12回	12月	対人関係が不安定で、自傷行為、性的逸脱行為を繰り返すケースについての検討	13
13回	平成14年１月	第８回のケース検討結果を受けて看護を実施してみた経過についての報告	22
14回	２月	重症強迫神経症のケースの安全確認への対応についての検討	20
15回	３月	学童期摂食障害患者の変化とその要因、今後の家族も含めた対応についての検討	7
16回	４月	無為、自閉的な生活をおくりながら、特に排泄面のセルフケアが低下しているケースについての検討	22
17回	５月	言語的コミュニケーションの取りにくいケースについての検討	17
18回	６月	拒薬を続けるケースへのこれまでの看護の振り返り	29
ワークショップ	９月	テーマ「病院から地域へ～精神障害者の地域生活の維持促進に関する支援、保健・医療・福祉の連携～」	88
19回	10月	入退院を繰り返している、自殺企図歴のあるケースに対して支持的、受容的な関わりについての検討	13
20回	11月	退院後断薬のため、症状が再燃し入退院を繰り返しているケースについて、服薬教育を含めた今後の関わりについての検討	16
21回	12月	事例報告と社会資源の紹介：多機関が関わるケースと医療につながっていないケースの紹介、町で活用できる社会資源、制度の紹介	28
22回	平成15年１月	訪問看護、ソーシャルクラブ、社会適応訓練事業を利用した地域生活支援についての経過報告	30
23回	２月	訪問看護における家族への支援について	27
24回	３月	12回の事例：成長過程や治療構造を明らかにしながら、看護の振り返りを行う	12
25回	４月	家族不在のケースの終末期における対応について	29
26回	５月	援助に対して拒否的な精神障害者を抱える家族への地域支援を通して～担当保健師の模索から～	30
★27回	６月	触法精神障害者の処遇に関する法制度の現状と課題	76
★28回	９月	12、24回の事例の検討会実施後の経過報告 研究会で作成したガイドラインにそって事例の情報収集や、データの意味について、記載方法など講義	16
29回	10月	気分にむらがあり、気分転換活動が進展しない事例への看護についての検討	12

★　講演会、学習会

Ⅲ　研究方法

1　調査対象

長崎精神看護研究会の第29回までの事例検討会の参加者157名
（参加者のうち勤務先不在者、ワークショップや学習会のみの参加者、ゼミ学生を除く）

2　調査期間：平成15年10月～12月

3　調査方法

調査票は参加者個人に郵送し、3週間以内に返送を依頼し、無記名自記式調査を実施した。アンケート内容は、事例検討会に関するこれまでの文献検討[4)7)8)9)10)]をもとに、①参加者全員に対して属性と事例検討会の学習効果について、【援助の学習の深まり】【意見交換】【連携】【意欲】【運営】の5つのカテゴリーからなる18項目の細項目に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」の4段階（配点1点～4点）で回答を求めた。さらに参加してみての学習効果について、精神保健・医療・福祉の連携を図っていくために必要なこと、事例検討会の運営に関することについて自由記述を求めた。

事例発表者に対しては、①の質問に加えて、【まとめ方】【対象理解】【意見交換】【資質の向上】【意欲】【運営】の6つのカテゴリーからなる22項目の細項目に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」の4段階（配点1点～4点）で回答を求めた。さらに発表を行ってみて学習につながったこと、発表にあたっての主催者側の支援について、事例検討会を行ってみて実践に活用できたことについて自由記述の意見を求めた。

4　分析方法

4段階尺度法から得られたそれぞれの細項目に対する得点、カテゴリー分類した得点の平均値と標準偏差を算出し、属性との比較を行った。検定はMann-WhitneyのU検定とKruskal-Wallis検定を行った。データ解析には、統計パッケージSPSS 11.0を使用した。統計的有意水準はすべて危険率5％未満とした。

5　倫理的配慮

アンケート用紙に調査目的と調査結果の取り扱いについての内容を記載し、無記名での返送とし、返送をもって同意が得られたものとした。

Ⅳ　結　　果

回収は66名（回収率42％）であった。参加回数別では、1～2回の参加者の回収率は30名(25％)、3回以上の参加者の回収率は36名（97％）であった。

1　対象者の属性

参加回数は、1～2回が30名（46％）で最も多く、3～5回が24名(36％)、6～13回は8名(12％)、14回以上は4名（6％）であった（図1）。性別は男性が17名（26％）、女性は48名（72％）、無回答1名（2％）であった（図2）。年代は40代が20名（29％）で最も多く、50代が19名（29％）、30代が11名（17％）の順であった（図3）。精神保健・医療・福祉領域（精神障害者援助に関連する領域）における経験年数は、5年以上が39名（59％）で最も多く、3～5年未満は17名(26％)、3年未満は10名（15％）であった（図4）。現在の活動場所は病院52名（78％）が最も多く、その他役場関係、訪問看護ステーション、教育関係機関、活動所などであった（図5）。職種は看護師が51名（76％）で最も多く、その他保健師、精神保健福祉士、指導員、教員などであった（図6）。

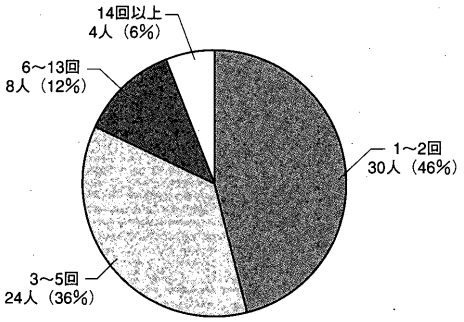

図1　参加回数

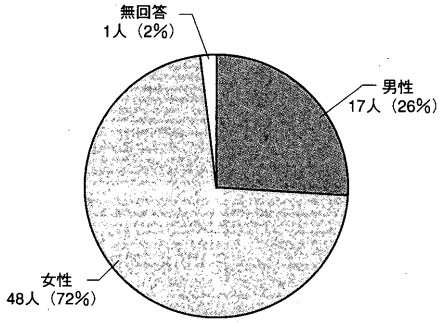

図2　性別

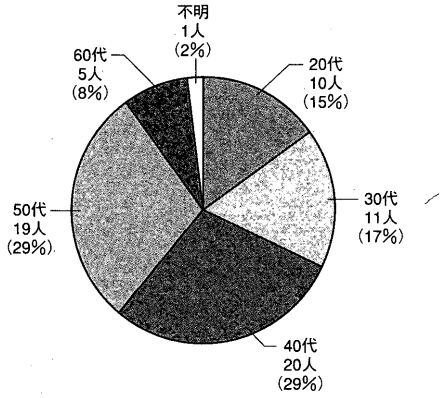

図３　年代

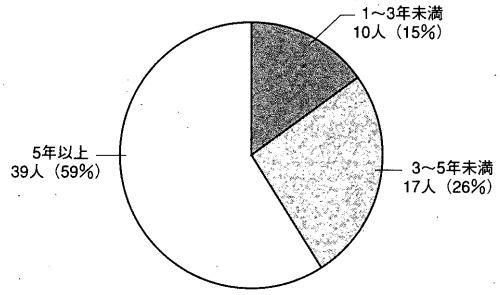

図４　経験年数

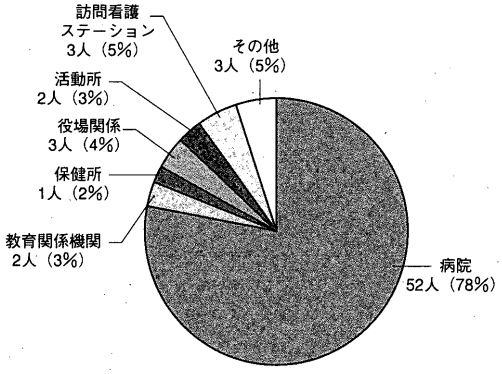

図５　活動場所

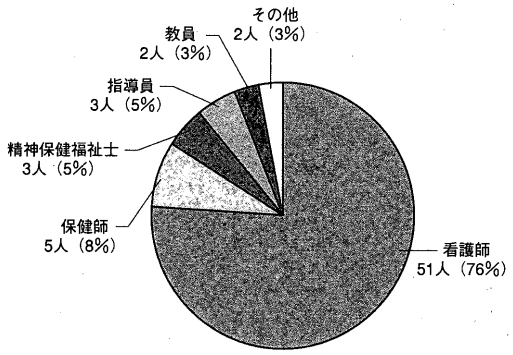

図６　職種

2　事例検討会への参加動機、発表動機（表２）

事例検討会に参加した動機は、「違う職場や職種の人の意見を聞けると思った」が33名(23.1%)で最も多く、「事例検討会は学習になると思った」が32名（22.4%）、「案内をみて興味をもった」は27名（18.9%）の順であった。事例検討会の発表動機は、「自分の援助を振り返るため」が９名（23.1%）、「自分がどのように対応してよいかわからなかったから」は７名（17.9%）、「司会者にすすめられた」は６名（15.4%）の順であった。

表２　事例検討会への参加動機、発表動機

	内　容	複数回答人(%)
1　事例検討会に参加した動機	違う職場や職種の人の意見を聞けると思った	33(23.1)
	事例検討会は学習になると思った	32(22.4)
	案内をみて興味をもった	27(18.9)
	大学の勉強会に参加してみようと思った	17(11.9)
	職場の人が事例提供者だった	13(9.1)
	ネットワーク作りに生かせると思った	12(8.4)
	勧誘されたので何となく	9(6.3)
2　事例検討会の発表動機	自分の援助を振り返るため	9(23.1)
	自分がどのように対応してよいかわからなかったから	7(17.9)
	司会者にすすめられた	6(15.4)
	自発的に行った	5(12.8)
	職場で問題になっていたため	4(10.3)
	何となく気になったため	3(7.7)
	上司にすすめられた	3(7.7)
	参加者にとって学習になると思ったため	1(2.6)
	うまくいった事例だったので	1(2.6)

3　学習効果について

１）参加者の学習効果について（表３）

各カテゴリーの得点は、【運営】(3.25±0.48)が最も高く、【援助の学習の深まり】(3.21±0.6)、【意見交換】(3.03±0.6) の順であり、事例検討会に参加することで、他職種や職場からの参加者と様々な視点で広く意見を言い合ったり、同じような問題を抱えた事例の検討から対応方法を学ぶなど、援助の学習が深まったり、意見が参考になったりしていた。しかしながら、【連携】(2.69±0.63)、【意欲】(2.64±0.65) は、どちらかといえばあてはまるという低い得点であった。細項目をみると、「参加メンバーとの相互交流により仕事上のネットワークが広がった」(2.41±0.91)、「気が楽になった」(2.38±0.87) の項目が低く、仕事上のネットワークの広がりや、気分が楽になることにはつながっていなかった。

表3　事例検討会の学習効果

カテゴリー	参加者全員の得点	番号	細 項 目	参加者全員の得点 n＝66
援助の学習の深まり	3.21±0.6	1	援助に関する視野が広がった	3.20±0.66
		2	知識や技術の向上につながった	3.20±0.74
		3	問題意識がもてた	3.30±0.76
意見交換	3.03±0.6	4	他施設の意見が参考になった	3.50±0.66
		5	他職種の意見が参考になった	3.15±0.85
		6	根拠のある学術的な内容の意見が参考になった	2.80±0.81
連　　携	2.69±0.63	7	病院、保健所など他の機関の援助内容がわかった	2.97±0.80
		8	病院、保健所など他の機関との連携方法についてわかった	2.73±0.78
		9	他職種（医師、保健師、看護師、PSW、指導員、作業療法士など）との連携方法についてわかった	2.64±0.74
		10	参加メンバーとの相互交流により仕事上のネットワークが広がった	2.41±0.91
意　　欲	2.64±0.65	11	気が楽になった	2.38±0.87
		12	仕事に対するやる気や意欲が向上した	2.92±0.69
		13	仕事に対する自信がついた	2.62±0.74
運　　営	3.25±0.48	14	検討会の時間は適当である	3.26±0.64
		15	参加者の人数は適当である	3.21±0.54
		16	検討会では自由に発言できる雰囲気がある	3.15±0.83
		17	発言したことは、メンバー同士で大切に受け止められている	3.24±0.68
		18	司会者は事例提供者の意図を明確にしながら会をすすめている	3.36±0.62

表4　参加形態、参加回数、経験年数、職種による学習効果

カテゴリー	参加形態		参加回数				経験年数			職　種	
	参加者（53名）	発表者（13名）	1～2回（30名）	3～5回（24名）	6～13回（8名）	14回以上（4名）	3年未満（10名）	3～5年未満（17名）	5年以上（39名）	看護師（51名）	看護師以外（15名）
援助の学習の深まり	3.16±0.58 (3.33)	3.41±0.67 (3.67)	3.04±0.66 (3.00)	3.19±0.49 (3.17)	3.58±0.43 (3.67)	3.83±0.33 (4.00)	3.20±0.65 (3.17)	3.04±0.65 (3.00)	3.29±0.65 (3.33)	3.30±0.52 (3.33)	2.91±0.76 (3.00)
意見交換	3.09±0.60 (3.33)	3.31±0.57 (3.33)	2.97±0.65 (3.17)	3.1±0.51 (3.00)	3.54±0.43 (3.50)	3.75±0.17 (3.67)	2.80±0.72 (2.83)	3.08±0.51 (3.33)	3.24±0.58 (3.33)	3.16±0.60 (3.33)	3.02±0.58 (3.00)
連携	2.62±0.6 (2.75)	2.94±0.74 (3.00)	2.42±0.65 (2.50)	2.72±0.5 (2.75)	3.28±0.28 (3.25)	3.31±0.55 (3.25)	2.55±0.44 (2.50)	2.38±0.75 (2.25)	2.85±0.57 (2.75)	2.80±0.59 (2.75)	2.30±0.64 (2.75)
意欲	2.57±0.63 (2.67)	2.92±0.71 (3.00)	2.54±0.63 (2.67)	2.64±0.76 (2.83)	2.83±0.25 (3.00)	3.00±0.72 (3.17)	2.27±0.62 (2.33)	2.61±0.61 (2.67)	2.75±0.66 (2.67)	2.80±0.56 (2.67)	2.11±0.69 (2.33)
運営	2.64±0.65 (3.2)	3.24±0.46 (3.40)	3.24±0.46 (3.10)	3.19±0.5 (3.20)	3.28±0.41 (3.30)	3.55±0.41 (3.60)	3.00±0.52 (2.90)	3.26±0.47 (3.20)	3.30±0.47 (3.40)	3.29±0.45 (3.20)	3.09±0.58 (3.00)

参加形態、職種は Mann-Whitney U 検定、参加回数、経験年数は Kruskal-Wallis 検定　$p < 0.05$

2）参加形態による学習効果（表4）

参加者と発表者という参加形態の違いによる学習効果を比較すると、【連携】【意欲】のカテゴリーで、参加者より発表者の方が有意に得点が高かった。参加するだけではなく、発表することで、より参加者同士が知り合うことになり、意欲の向上につながっていた。特に【意欲】のカテゴリーの細項目では、「気が楽になった」の項目で有意な差がみられており、参加するだけではなく、発表することで気が楽になっていた。

3）参加回数による学習効果（表4）

参加回数別の学習効果を比較すると、【援助の学習の深まり】【意見交換】【連携】のカテゴリーで参加回数が多いほど、有意に得点が高かった。細項目では、「知識や技術の向上につながった」「他職種の意見が参考になった」「病院、保健所など他の機関の援助内容がわかった」「病院、保健所など他の機関との連携方法についてわかった」「他職種（医師、保健師、看護師、PSW、指導員、作業療法士など）との連携方法についてわかった」「参加メンバーとの相互交流により仕事上のネットワークが広がった」の項目で、有意な差がみられ、継続して参加することで、知識や技術の向上につながったり、他職種の意見が参考になったり、連携する上での他職種の役割や連携する方法がわかり、相互交流による仕事上のネットワークの広がりにつながったりしていた。

4）経験年数による学習効果（表4）

経験年数別の比較では、【連携】のカテゴリーにおいて、経験年数3～5年未満（2.38±0.75）、3年未満（2.55±0.44）、5年以上（2.85±0.57）と有意な差がみられた。細項目をみると、「病院、

表５　事例発表者の学習効果

カテゴリー	得点	番号	細項目	得点 n＝13
まとめ方	3.17±0.5	1	情報収集の視点がわかった	3.23±0.6
		2	アセスメント能力がついた	3.15±0.55
		3	問題点が明確になった	3.23±0.6
		4	計画の立案方法がわかった	3.08±0.49
対象理解	3.15±0.48	5	対象者の行動や言動の意味が理解できた	2.92±0.49
		6	対象者の強みや長所が理解できた	2.85±0.69
		7	援助者と対象者の関係の振り返りにつながった	3.46±0.52
		8	別の視点をもつことができた	3.38±0.65
意見交換	3.08±0.67	9	意図していた内容について参考になるアドバイスがもらえた	3.31±0.63
		10	他の職種の意見が参考になった	3.08±0.86
		11	他の職場での意見が参考になった	2.85±0.8
資質の向上	3.28±0.49	12	援助の根拠が明確になった	3.08±0.64
		13	これまでの援助の振り返りにつながった	3.31±0.48
		14	問題意識をもつことができた	3.46±0.52
意欲	3.0±0.62	15	気が楽になった	2.92±0.95
		16	仕事のやる気や意欲が向上した	3.23±0.6
		17	仕事にたいする自信がついた	2.85±0.55
運営	2.98±0.52	18	検討会の時間は適当だった	3.31±0.63
		19	参加人数は適当だった	3.08±0.76
		20	司会者や開催者との打ち合わせは十分だった	2.62±0.77
		21	自分が意図したことに沿って会が運営された	3.08±0.49
		22	自分が伝えたいことを十分伝えることができた	2.85±0.55

保健所など他の機関との連携方法についてわかった」の項目が、経験年数３～５年未満は得点が低かった。【連携】以外のカテゴリーにおいては、５年以上の経験年数と５年未満では、有意な差はみられないものの、５年以上のほうが得点は高く、より学習効果がみられていた。

５）職種による学習効果（表４）

職種を看護師とそれ以外で比較すると、【連携】【意欲】のカテゴリーで、有意な差がみられ、看護師の参加者のほうが得点は高かった。細項目では「問題意識がもてた」、「参加メンバーとの相互交流により仕事上のネットワークが広がった」「気が楽になった」「仕事に対するやる気や意欲が向上した」「仕事に対する自信がついた」の項目で有意な差がみられた。

６）事例発表者の学習効果（表５）

事例発表者の学習効果をみると、カテゴリー別では【資質の向上】(3.28±0.49)、【まとめ方】(3.17±0.5)、【対象理解】(3.15±0.48) が高い得点であった。事例を振り返りながらまとめなおす段階で、自ら情報不足や全体像の把握が不十分であることに気がついて、発表前に関係者との意見交換を行ったり、問題を整理することができたりしていた。さらに発表時に他職場や職種からの意見を聞くことにより、自分自身や職場全体の関わりを客観的に指摘してもらえることで、視点が広がったり、援助の根拠が明確になったりして、資質の向上につながっていた。しかし【運営】の細項目の「司会者や開催者との打ち合わせは十分だった」という項目では、十分でないと答えていた。自由記述では、発表前に修正箇所や足りない情報などのアドバイスや、発表することでのメリットがあるような打ち合わせが必要と考えていた。また事例対象者自体に大きな変化はないものの、自分の中で行き詰っていたものがふっきれて関わりやすくなったり、入院中の家族への支援が不十分であることに気づき、病棟全体で家族支援に取り組むなど、検討内容を実践に生かしたりしていた。一方で病院や地域社会の資源やシステムの問題が関係している場合、検討内容を実践には生かせず、ジレンマを感じていた。また情報の不足があり、質問ばかりで検討が終わってしまい活用できたという思いを得られていないという意見もあった。

Ⅴ　考　　察

今回の結果では、「違う職場や職種の人の意見を聞けると思った」「事例検討会は学習になると思った」という参加動機をもって参加した人が多く、カテゴリーの得点からも事例検討会に参加して【意見交換】が参考になり、【援助の学習の深

まり】につながっていた。しかしながら、ネットワーク作りを期待して参加した人もいる中、参加メンバーとの相互交流を通して仕事上のネットワークを広げるという【連携】については、事例発表者は広がりを感じてはいるものの、参加者の得点は低く、全体としては十分な効果が得られていなかった。【意欲】に関しては、発表者の方が得点は高く、発表することで、気が楽になっていた。参加するだけでなく、発表することや、継続して参加することで学習効果が高くなっていた。しかし一方では、参加回数が少ない人、参加するだけの人、看護師以外の人は、それ以外の人と比べると得点は低かった。以上の結果をふまえ、今後の継続教育の一環としての事例検討会のあり方として、継続した参加に向けての支援、発表者に対する支援、経験年数や職種の違いに応じた支援のあり方について考察する。

1　継続した参加に向けての支援

回収率は42％であるが、参加回数別にみると、１～２回の参加者の回収率は25％、３回以上の参加者の回収率は97％であった。１～２回の参加者にとって、期待していた学習効果が得られなかったため、継続参加にいたらなったのかどうかは確かではないが、参加回数が多いほど、【援助の学習の深まり】【意見交換】【連携】のカテゴリーでより学習につながっていた。逆に参加回数が少ない参加者にとって、学習の深まりや意見が参考になることが少なく、特に１～２回の参加者にとっては【連携】のカテゴリーついての学びは得点が低かったことから、継続して参加することで、１つの話題だけではなく、様々な事例や話題にふれることになり、より学習効果につながっていると考えられる。従って参加者のニードにあった学習内容を提供するためには、参加者のニードを把握し年間計画の中で話題に多様性をもたせることや、参加者の意見が反映されて、主体的な参加となるようにディスカッションの中に小グループワークを取り入れるなど、学習方法の工夫を図っていくことが必要である。

また参加者と発表者では、発表者のほうがより連携が深まり、意欲の向上につながっていた。発表動機として、「自分の援助を振り返るため」「自分がどのように対応してよいかわからなかったから」という動機をもって発表している人が多いことから、もともと意欲をもって主体的に参加していることが関係しているとも考えられる。参加者にとっても自分の体験とのすりあわせができるように、多様性をもたせた話題を提供し、活発に発言し、討論できる場となるように配慮していく必要がある。

2　発表者に対する支援

事例検討という方法は、提出された事例から発表者が検討したい内容にそって進行をすすめていくものであるが、情報の不足や事例提供の仕方によっては質疑応答で終わってしまい、検討したい内容の検討がすすまず、参加者、発表者両者にとって不全感が残る。

また司会者や開催者との打ち合わせは十分でないと答えている人もみられ、打ち合わせの中で不足した情報を補うなどの原稿作成の時点での支援と、参加者が事例をイメージし検討内容についてディスカッションできるような司会の方法が必要となる。青木ら[10]による精神科看護領域における事例検討会の司会の技術についての報告では、司会者は意見交換を促進する技術の中で、表現を促す、方向付ける、教育的に補う、整理するなどの技術を使い分けながら、意見交換が活発に行えるように働きかけていた。また効果的なケースカンファレンスにおける司会者の役割として、司会者は常に「事例提供者の反応」と「参加者の反応」に注意を払い、お互いのズレを検討しながら、常に今何が討議されているのか、まだデータ収集の過程なのか、そろそろ問題の明確化ができる時期なのか、解決策がそろそろ自然とでてくる時期なのかという過程に注意する必要があると言われている[11]。当大学における事例検討会においても、これらの技術や役割をとりながら、発表者だけでなく、参加者にとっても十分な意見交換が可能となるような司会、進行が必要となる。

3　経験年数や職種の違いに応じた支援

経験年数３～５年未満の参加者は、特に他機関との連携方法についての得点が低かった。経験年数３～５年未満は、技能習得に関するドレファイスモデルの看護への適応を試みたベナーによると、中堅レベルにあり、状況をより全体的にとらえる特徴がある[12]。しかしながら全体としてとらえながらも、制度上や病院システム上の問題などがあ

る中、役割を果たしていく上で具体的な行動に移すことが困難であり葛藤を抱きやすいと考えられる。そのため、今回の結果においても援助を行うさいに、他機関との連携を図っていくことについての必要性はわかるが、連携方法についてわかるというところまで至らなかったのではないかと考えられた。よって３～５年目の経験年数の参加者には行動へ移すための具体的な方法を学習できるように支援していくことが必要ではないかと考えられた。

また【連携】以外のカテゴリーでは、有意な差はみられないものの、５年以上の経験年数の方がより学習効果が高かったことから、会の途中で事例に関連する内容のミニレクチャーを取り入れるなどを通して、経験年数の少ない参加者に対しても支援していく必要がある。

現在の活動場所における職種の違いによる結果からは、看護師である参加者の方がそれ以外の人よりは意欲の向上につながっていた。これまでの事例検討会の内容が病院の看護師からの事例発表が多く、看護の視点からの検討が多かったため、看護師以外の職種にとっては、検討会での学びにより気が楽になることや、やる気や意欲が向上すること、仕事に対する自信がつくということには直接つながらなかったのではないかと考えられる。今後看護師以外の職種の参加者からの事例発表をすすめていくことで、それぞれの活動内容がわかり、相互交流を通して意欲の向上につながっていくのではないかと考える。しかしながら事例検討を実施する場合、自由で率直な自己表現により参加者が互いに活性化され、より深みのある検討会となるが、宮本らの調査によると実際の検討会での発言は感情表現や自己理解にふれる発言が乏しいといわれている[13]。自由で率直な自己表現ができるためには、何を言っても、また何を言われても大丈夫だという安心感が必要となり、そのような共通認識に立って事例検討に臨むことが前提となるが、様々な活動場所から異なる職種が集まる場合、ケアの視点や方法が異なるため、その前提がゆるがされる場合がある。そのため検討を行う前提として、各々の専門職の視点から意見を述べ合うことで互いの違いを知り、認め合えるように、事例検討会の参加にあたっての参加者のルールについて、意見をよく聞いて、相手を批判しないことなどについての配慮が必要である。

Ⅵ　まとめ

アンケート調査の結果から、継続教育の一環としての事例検討会のあり方として、以下のことが明らかになった。

1　事例検討会に参加することで、援助の学習が深まったり、他施設、他職種の意見が参考になっていた。しかし連携を図るためのネットワーク作りや意欲の向上の面ではさらなる課題やジレンマを抱えていた。現場で活かせる学習となるよう、援助の根拠となる学術的な視点を取り入れながら、より具体的な内容の意見交換が可能となるように、会の運営をすすめる必要がある。

2　参加回数が少ない参加者は、継続して参加している人より学習効果が少なかった。継続した参加を促すために、参加者のニードを把握し、年間計画の中で話題に多様性をもたせることや、進行において、グループワークなどを取り入れて、参加者が主体的に参加できるような運営方法の工夫が必要である。

3　事例を発表することで参加するだけでは得られない学習効果を得ていた。しかし開催者との打ち合わせは不十分であると感じており、発表前に打ち合わせを行い、不足している情報を補えるように原稿作成時に対する支援や他者にわかりやすい発表となるよう支援していく必要がある。

4　精神保健・医療・福祉の領域での経験年数の違いでは、３～５年未満の経験年数の参加者は、他職種、他機関との連携に関することについての得点が低かった。この時期は全体の状況と現状との間でジレンマを抱えやすい時期であり、参加者の経験年数に応じた支援のあり方をより具体的にしていく必要がある。

5　５年以上の経験年数の参加者のほうが、それ以外の参加者より、より深い学習につながっていた。経験年数が少ない参加者にとっても、根拠のある援助についての知識を得ることができるように、事例に関連する内容のミニレクチャーの実施などが必要である。

6　看護師以外の参加者は少しずつ増えてはいるもののまだ少数であり、意欲の面で平均以下となっている。ケアの視点や方法が看護師とは異なっているため、テーマに関してそれぞれの活動場所や職種の違った視点からの発表や意見を促せるような会の進行が必要である。また視点の違う職種同士で行う事例検討会においては、一定のルールにそって運営していく必要がある。

Ⅶ　おわりに

今回、継続して行ってきた事例検討会について振り返ることで、主催者側の役割や支援内容について具体的に明らかにすることができた。継続して参加することでの学習効果は高く、今後も精神障害者およびその家族の生活の質の向上に向けて日々取り組んでおられる方々と、より活性化した研究会となるように会を運営していきたい。

今回ご多忙中にも関わらず、アンケートにご協力下さいました参加者の方々、継続することが大事とエールを送ってくださった皆様方に感謝申し上げます。

引用文献

1　外口玉子：精神科看護事例検討会ゼミナール　方法としての事例検討，日本看護協会出版会，東京都，1981
2　宮本真巳，伊野波ヒデ子，岡崎勝博他：精神科領域における看護プロセスの成立要件に関する方法論的研究，看護37(4)，131-160，1985
3　宮本真巳，小宮敬子，広瀬寛子他：精神看護における継続教育の方法論に関する研究―事例検討会の分析から―，日本精神保健看護学会誌4(1)，1-12，1995
4　巻田すみ子，田中都智美，佐伯千恵子他：多職種・複数施設メンバーによる精神科事例検討会の効果と課題，看護展望，24(9)，87-94，1999
5　天谷真奈美，宮地文子，吉田伸子他：精神病院が提供する継続教育のプログラムの特徴―S県内の精神病院とその他の病院との対比から―，日本精神保健看護学会誌12(1)，58-64，2003
6　龍野浩寿：精神科領域における臨床看護研究の困難感，精神科看護31(5)，55-60，2004
7　熊倉みつ子，飯吉令枝，佐々木美佐子：訪問看護ステーションにおける事例検討会開催状況とその意義，新潟県立看護短期大学紀要7，55-64，2001
8　桑野タイ子：看護実践にいかす事例検討，看護実践の科学15，18-24，1990
9　川口優子，松田宣子，奥田博子他：地域精神保健活動を推進するネットワークづくり―専門職者の意見―，神戸大学医学部保健学科紀要16，1-9，2000
10　青木典子，新田和子，梶本市子：精神科看護領域における事例検討会の司会の技術，高知女子大紀要看護学部編53，1-10，2003
11　宇佐美しおり：ケースカンファレンスを促進する技術，精神科看護26(10)，64-67，1999
12　Patricia Benner: From Novice to Expert Excellence and Power in Clinical Nursing Practice, 1984, 井部俊子訳，ベナー看護論―達人ナースの卓越性とパワー，医学書院，10-27，東京都，1992
13　日本精神科看護技術協会監修：精神科看護の専門性をめざしてⅡ：専門基礎編，精神科看護―事例検討という方法，精神看護出版，14-42，東京都，2002